

# 桑原遺跡発掘調査概要

安威川ダム建設事業に伴う桑原・地福寺遺跡の調査

2006年3月

大阪府教育委員会



## はじめに

大阪府茨木市の山間部には考古遺跡・建造物・石造物など多くの文化財が残っている。

京都府亀岡市に源を発する安威川が丘陵から平野にぬける上流側の丘陵上には6世紀を中心とした群集墳である塚原古墳群や7世紀の阿武山古墳・初田古墳群など、飛鳥時代前後の古墳が多くある。その古墳群の間を安威川が大きくSの字に曲がり抜ける左岸に立地するのが桑原遺跡である。平成16年度の調査では低い地点を中心に調査し、中世の谷や掘立柱建物・環濠状溝群、飛鳥時代前後の溝・土坑の検出があった。平成17年度では主に高所で古墳時代後期・飛鳥時代の古墳が群集していることが分かった。

平野より山間に至り、花崗岩製の鎌倉時代末期とされる府指定の地福寺層塔がある。平成16年度の調査はその層塔の地下構造を知るために発掘調査を行った。その結果、平安時代の木棺直葬墓と山側に飛鳥時代の横穴式石室を検出することになった。

今、安威川上流の丘陵部は大きく景観を変えようとしている。本調査に見られる古墳・飛鳥時代や中世に属する遺構・遺物の所見は当該地が山間部ゆえにもつ特色であり、その地域性のある歴史的な重要性を如実に示すものであると言えよう。

調査にあたっては、茨木市教育委員会、安威川ダム建設事務所、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただいた。深く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力を願いするとともに、緑豊かな山間の地についてよりよい保護・保全・活用に向けて共に推進できるようお願いする次第である。

平成18年 3月

大阪府教育委員会文化財保護課長

丹上 務

## 例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府土木部の依頼を受け、安威川ダム建設事業のうち残土処分地「桑原地区」の一部と用地買収箇所「地福寺」について平成 16・17 年度に実施した茨木市桑原地内所在の桑原遺跡・地福寺遺跡発掘調査の概要報告書である。その調査番号は桑原遺跡が 04040・05002、地福寺遺跡が 04041 である。
2. 調査は、文化財保護課 調査第一グループ 総括主査 岩崎二郎、主査 一瀬和夫、技師 小川裕見子、特別嘱託員 堀江門也が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府土木部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、茨木市教育委員会、大阪府土木部、安威川ダム建設事務所をはじめとする諸機関、関係諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、一瀬・小川が担当し、執筆は調査担当者の他、参加者が分担した。
6. 本書に掲載した遺構の一部及び遺物写真の撮影は、有限会社 阿南写真工房に委託した。また、航空写真測量については平成 16 年度が玉野総合コンサルタント株式会社大阪支店、平成 17 年度が株式会社 航空撮影センター大阪支店へ、鉄製品の保存処理は株式会社 京都科学に委託した。
7. 本概報は、300 部を作成し、一部あたりの単価は 441 円である。

## 目次

### はしがき

### 例言

### 目次

第 1 章 調査に至る経過	1
第 2 章 桑原遺跡の調査	3
第 1 節 検出遺構	3
第 2 節 出土遺物	5
第 3 章 地福寺遺跡の調査	6
第 1 節 検出遺構	6
第 2 節 出土遺物	11

### 写真図版

### 報告書抄録

# 桑原遺跡発掘調査概要

## 安威川ダム建設事業に伴う桑原・地福寺遺跡の調査

### 第1章 調査に至る経過

昭和42年の北摂豪雨災害を契機とし、大阪府は安威川治水を目的とするダム建設を計画した。その後、その範囲を大阪府教育委員会が財団法人大阪府文化財調査研究センターに指示し、同センターが平成2~8年度に「安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査」(注1)として事前に実施した。調査は、ダム建設に影響を受ける流域のうち、山間部を中心に茨木市車作・大岩・生保・大門寺・桑原・安威地区を対象としており、考古・地理・地質・生物・建造物・歴史・美術工芸品・石造物・民俗・芸能の10部門で行われ、様々な知見が得られた。

そのうち調査を必要とする今年度の河川関連事業に対して、本府教育委員会は平成16年度に、安威川ダム建設事業のうち残土処分地「桑原地区」の一部と用地買収箇所「地福寺」に伴った発掘調査を実施し、平成17年度は残土処分地「桑原地区」の残りの部分の発掘調査を実施している。

「桑原地区」は、安威川が丘陵から平野の段丘部にぬける上流側にあたる。水流が大きくS字に曲がって西側に貼り出す微高地上に立地する桑原遺跡がある。この遺跡から東側は、高槻市側の丘陵へと急上昇する。その頂部付近には7世紀末の阿武山古墳やその南斜面には6世紀を中心とした塚原古墳群という群集墳が広がる。一方、安威川をはさんだ西側の対岸にも7世紀の初田古墳群があり、本遺跡は飛鳥時代前後の古墳に囲まれた特異な歴史的環境をもつことになる。

ダム建設に伴う残土処分計画地である桑原遺跡は、盛土予定が著しい微高地の南半分の箇所について、平成15年度に本府教育委員会 主査 泉本知秀を担当者として、試掘調査を行った結果、新規発見した遺跡である(注2)。その際、左岸沿いの低い面は川の氾濫を受けていたものの、主に北側の丘陵沿いでは弥生土器、土師器、瓦器などの遺物が出土した。特に出土遺物のあった範囲の北東端においては鎌倉時代後半から室町時代初頭の瓦器・土師器が出土する上坑・溝を検出している。

平成16年度の調査では遺構・遺物を確認した用地のうち、南東低地部分5180m<sup>2</sup>の発掘調査を行うことになった。平成17年度は下期から中央北側の高台部分3880m<sup>2</sup>を実施している。

一方、「地福寺」はダム建設事業に伴った用地買収箇所内にある府指定の花崗岩製石造五重塔の移動に伴い、それが位置する箇所の地下遺構・遺物の確認を24m<sup>2</sup>の規模で行ったものである。その結果、テラス面造成と土器の出土を確認したことから、新規発見遺跡・地福寺遺跡として、さらに調査範囲を50m<sup>2</sup>に広げて発掘調査を行った。

対象地は前者の地点より山間にに入った主要地方道茨木・亀岡線の西側沿いにあり、北西に阪急

バスの「奥垣内」バス停がある。その道を左で東側には安威川が流れる。東に向かって貼り出す丘陵の南東鞍部に地福寺境内があり、その北西にある観音堂裏の急斜面をやや登った地点にこの層塔が存在した。

(一瀬)

(注1) 財團法人 大阪府文化財調査研究センター『安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書』財團法人 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第9集 1997年。

(注2) 大阪府教育委員会『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』8 2005年。

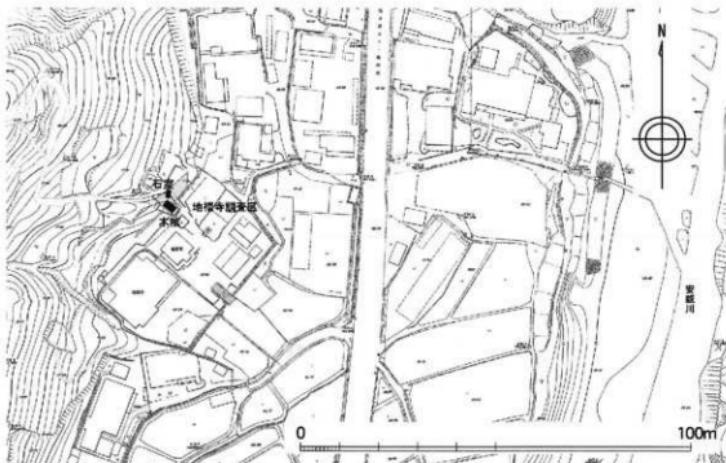
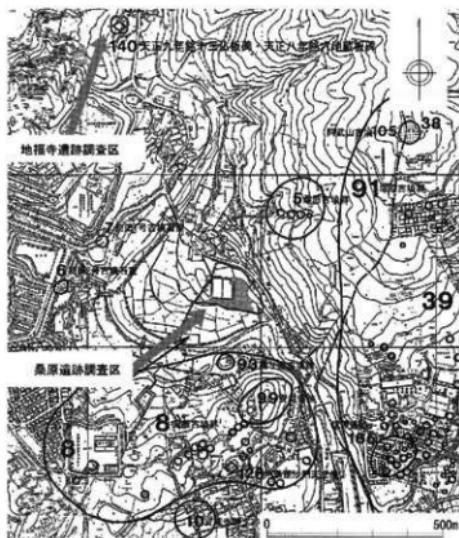


図1 地福寺遺跡調査位置図



## 第2章 桑原遺跡の調査（調査番号 04040・05002）

### 第1節 検出遺構

桑原遺跡の平成16年度下半と平成17年度上半に行なった調査の主だった遺構として、調査区東半に集中する谷とその東側にある微高地上に立地する掘立柱群、西半西側の未調査区を囲むように存在する環濠状溝群とその範囲に集中する掘立柱がある。平成17年度下半から平成18年度上半については現在調査中であり、次年度に報告する。

#### 1. 谷

調査区北東側は丘陵に向かって、雑壇が急上昇するが、その変換線にそって幅7～10mの谷を検出した（東谷）。谷そのものが遺跡の東限となり、北東の阪急バスの「桑原橋」バス停付近へとのびていく。これは、永く西側に展開する遺跡の水源となっていたと考えられる。

谷の上層からは南北朝頃の瓦器椀・土釜が出土し、埋没年代がこれにあたり、その後は、周囲の地山の礫などで埋め、一段低くなった谷水田へと整備されていく。また、上層下では9世紀末・平安時代前半期の内面黒色上器杯や獸骨類が出土する。

この谷の埋没後、遺跡北東部の付け根部分から南中央に向けて新たな谷が開き、巨石が押し流される上石流のようなものに見舞われたようである（中谷）。この区間はそれ以降に、小規模な雑壇の水田ないし畑が規模を大きくしていく過程を示す耕土層が重層し、多いところでは5面は確認できる。耕地の拡大はその周囲においても見られ、地山の礫層を削平し、単位が大きくなる。新しい時期のものほど地目境に石組みの暗渠や石垣列といった石を多用する構造物が備わり、増加していく傾向にある。

#### 2. 掘立柱群

そうした耕作地の削平をあまり受けなかった地点については、南東部、南東方向に舌状にのびる微高地上で掘立柱群が検出できた。一部の柱穴P2・10からは内面の黒色土器が出土し、少なくとも9・10世紀の平安時代前半期の建物が存在したことが分かる。

一方、北端でも掘立柱群が確認できる。これが集中する地点には黒味がかかった灰褐色シルトを基調とする整地層及びその下に黒灰色粘土の覆土が地山に貼りつくように存在し、前者は土中より瓦器椀等の14世紀末・南北朝期の遺物が出土した。後者の層は、古墳・飛鳥時代に相当する。同様な整地層、覆土は調査区南西でも認めることができる。それは北側の未調査区に沿って東西に広がる。

#### 3. 環濠状溝群

そうした整地層が残るそれぞれの地域の外縁部に沿って数条の溝が確認できた。北端では東谷上流部が西へ屈曲する部分から南へ南北方向に少なくとも3条の溝が確認できる（溝1・2・4）。中谷の急流はこの溝群全体のくぼみに誘導されたものと考えられる。また、東谷に平行して南側に東西方向の溝3を検出した。この付近から陶棺片も出土する。

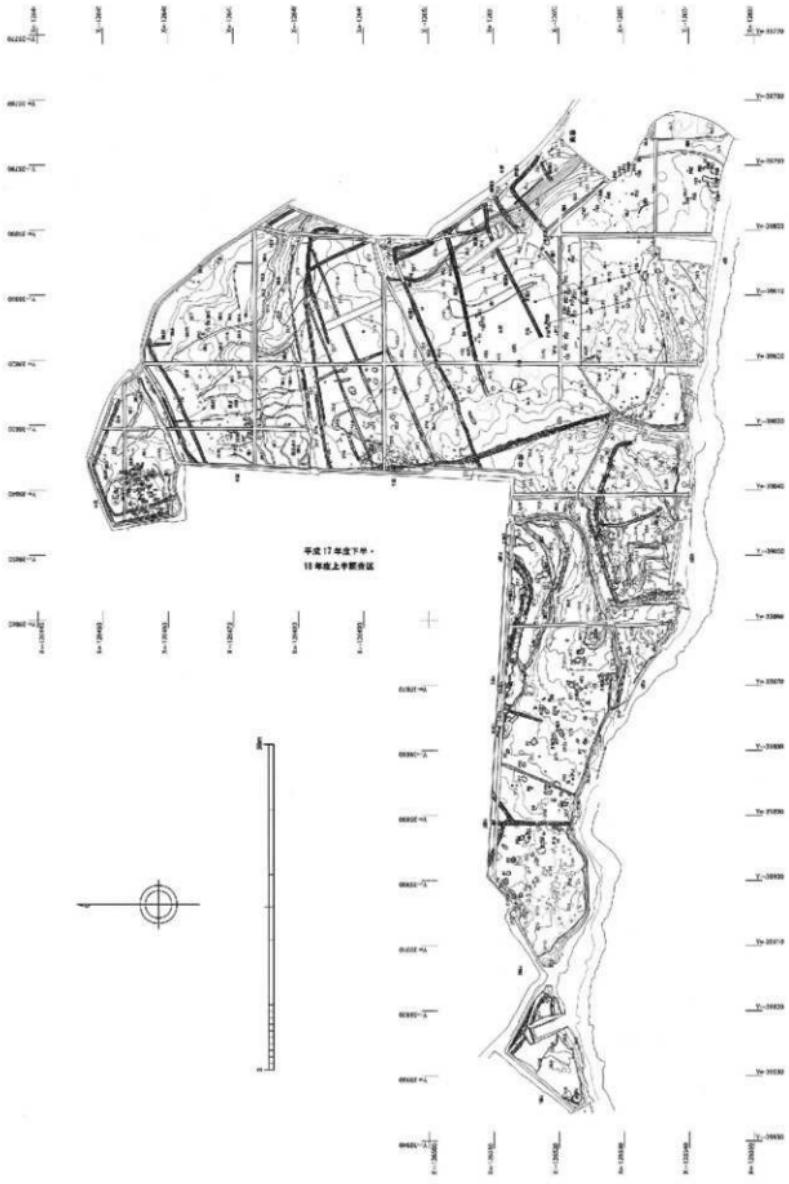


図3 桑原遺跡 平成 16 年度・17 年度上半調査平面図

さらに、南側の整地層も平面L字形を呈する3条の溝群に囲まれるように存在し、(溝1～3)北側の未調査区へと続く。溝1の上層では14世紀末・南北朝頃の瓦器碗が、下層では完形に近い須恵器横瓶が出土する。下層と重なる溝群の中にある土坑1からは7世紀中～後葉・飛鳥時代の須恵器杯身が出土する。

#### 4. その他の遺構

上記にさかのぼる遺構・遺物としては、ピットP6から庄内式瓈形土器の古いものが出土する他、サヌカイト剥片の出土もある。

(一瀬)

#### 第2節 出土遺物

出土した遺物は、土器、陶磁器、瓦、木製品、獸骨、サヌカイト片、陶棺のふたの破片であった。土器には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器が含まれる他、下層からは庄内式瓈形土器、縄文土器と見られる胎土の粗いものも出土した。土師器の主だったものには杯、皿(暗文入りのものも含む)、小皿があり、甕や高杯の脚部も出土した。その他の土師質のものには土釜、甕、鉢の口縁部、三足土釜の脚部、取手もしくは脚と見られる破片などが見られた。須恵器には杯身(高台付きのものも含む)、杯蓋、甕、鉢、壺、高杯の他、2区の溝1下層(土坑)からは完形に近い横瓶が出土した。瓦器は碗と断定できる破片が大半であり、中には高台付きの物も見られた。黒色土器には器形を特定できるほど大きな破片はなかったが、すべて内黒であった。

陶磁器には白磁、青磁、緑釉陶器などの他、近現代遺物見られる絵入りや茶碗風の陶器片があった。白磁・青磁には碗が多く、中には高台付きの底部も含まれていた。その他ものにも碗が多く高台付きの底部も数点あった。緑釉陶器には碗の他、長頸壺の頸部と見られる破片があった。

(小川)

(注) 調査については、小倉 勝・藤井信之・富田卓見・高崎千佳・田中真希代他、諸娘諸氏の協力を得た。

## 第3章 地福寺遺跡の調査（調査番号 04041）

### 第1節 検出遺構

#### 1. 地福寺層塔（石造五重塔）

層塔は調査区南側やや西で、斜面のほぼ中央の平坦部に位置していた。花崗岩製の石造五重塔で大阪府文化財に指定されており、詳細は『わがまち茨木 石造物編』（茨木市教育委員会）に記載される。

各部の細かい寸法は総高 200.0cm。宝珠高 8.0・径 11.5cm、宝珠ツマミ部径 3.0cm。請花高 5.0・最大幅 13.0cm。九輪高 31.5・最大幅 10.0cm、3.0cm ごとに輪が彫出で表現されている。伏鉢高 8.0・最大幅 15.0cm。塔身高 87.5・最大幅 48.0cm、5 層の屋蓋は上からそれぞれ笠端部高がそれぞれ 7.0・9.0・10.0・10.0・10.0cm、最大幅が 37.0・40.0・42.0・45.0・48.0cm。軸部高 28.0・幅 27.0cm、4 面に彫られている如来座像は高さ 18.0cm。基礎は高さ 37.0・幅 53.0cm、現状は下部の 2/3 程が地中に埋まっていた。

基礎の西面に銘文が刻まれているが、風化の影響でごくわずかに文字が確認できる程度であった。銘文中に徳治参年（西暦 1308 年）の文字があることから鎌倉時代末期のものと考えられるが、五重塔の全ての部分が鎌倉時代のものであるかは不明である。またこの五重塔は、中臣鎌足の供養の為に設立されたとも伝えられている。

塔の現位置や各部寸法の実測後は、南南西 150m に新築移転された現・地福寺境内に移された。

墓地には現地表面に数多くの石製品が見られたが、層塔の丘陵側付近を中心として、計 28 体が土中より東西方向にくの字の列になって出土した。ただし、一石五輪のほぼ完形のもの、空輪もしくは空輪 + 風輪のみのもの、石碑といった種類があるが、その配列は不規則である。

ほぼ完形の 22 体中、層塔西側にあった 1～3・5・6・18～27 の 15 体は現地表またはそれに近いところで寝かされた状態で置かれていたことから、本来あった場所から集められたものとみられる。層塔北側のものは、掘り進んでいくうちに一部倒れてしまっているがほぼ立った状態のまま層塔を開むようにして並んで見つかったことから、これらは置かれた当時のまま埋まつたものとみられる。石碑 13・29 は五重塔北東に並んでいる層塔の後ろで倒れた状態で見つかった。

#### 2. 上層遺構

層塔下で上師器壺が認められたことから、調査区を拡張して調査を行った。上層では、ピット 3 基とテラス造成を検出した。

テラス造成 テラスは調査区西半で検出した。現状では層塔を中心とし、斜面裾に一石五輪塔等が並べられていた直下に相当する。西壁断面の所見からは西半斜面の中ほどを削り込んでテラス部分を造成し、そこに層塔等を置いたと考えられる。また、層塔の位置から西へおよそ 1 m 部分で、上面が平坦な長さ 0.30～0.40 m 程の石が斜面に沿って下から等間隔に 3 個が並べていたのを検出したことから、斜面下からこの石を足場にして登り、テラス部に置かれた層塔を

拌めるようになっていたと考えられる。

**ピット** ピット S P 1 は下層で検出した石室南東部よりに長径 0.80・短径 0.50 m の楕円形で、深さは 0.60 m ある。ピット S P 2 はほぼ層塔直下に位置し、径 0.80・深さ 0.26 m ある。ピット S P 3 は木棺墓の西側で検出し、径 0.40・深さ 0.10 m ある。ピット S P 1 は横穴式石室のはずれた石の跡、ピット S P 2・3 はそれぞれ木棺墓を切る。

### 3. 下層遺構

下層遺構として、木棺墓と横穴式石室をそれぞれ 1 基ずつ検出した。

**木棺墓** これは、層塔が置かれていた位置の下、やや南よりに北西—南東方向で検出した。現存で墓壙は長さ 3.30 m、幅 1.67 m、深さ 0.78 m を測る。棺身は長さ 2.29・幅 0.75・深さ 0.45 m である。墓壙南東端部はテラス造成時、またはそれ以前にも削平を受けたと考えられ、現存しない。土層断面より、木棺を納めた後、周囲に裏込め土を充填し、全体を覆い、木棺が朽ちた後

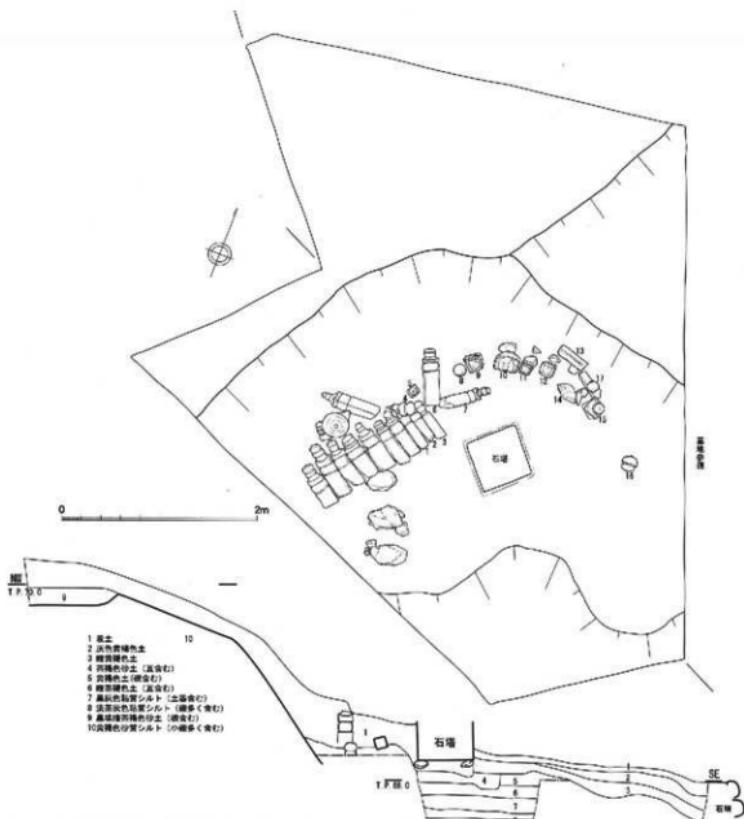


図 4 地福寺遺跡 石製品出土状況図

に陥没して上部から土砂が流入した状況が確認できた。その陥没部分上層より平瓦と丸瓦、下層より土器師甕が出土した。甕は本来棺上に完形品が据え置かれたものと考えられる。これより9

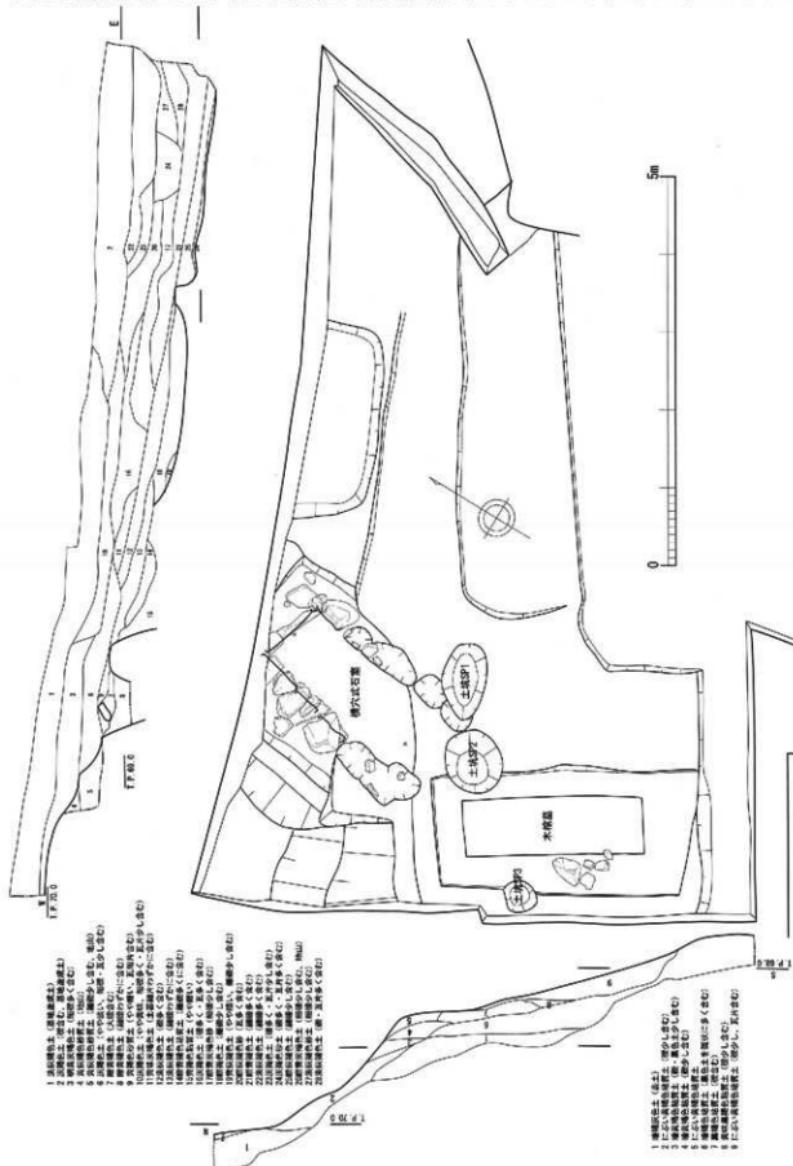


図5 地福寺遺跡 下層遺構平面・土層断面図

世紀、平安時代前半の年代が推測される。

横穴式石室 これは、調査区北壁のやや西側で検出した。その南西側半分と上部は近代以降の石垣と雑壇造成によって削平を受け、石室が残存する直上まで近代以降の瓦が出土した。玄室は現存の状況で長さ 1.43 m、幅 0.85 m、高さ 0.89 m である。南側に一部、側壁の抜き取り穴が検出できることから、全長 2.58 m、玄室長 2.10 m 程度、右肩袖の石室が類推できる。ただし、全長についてはこれより長くなる可能性もある。石室材は花崗閃緑岩を中心で、大きさ 0.80 ~

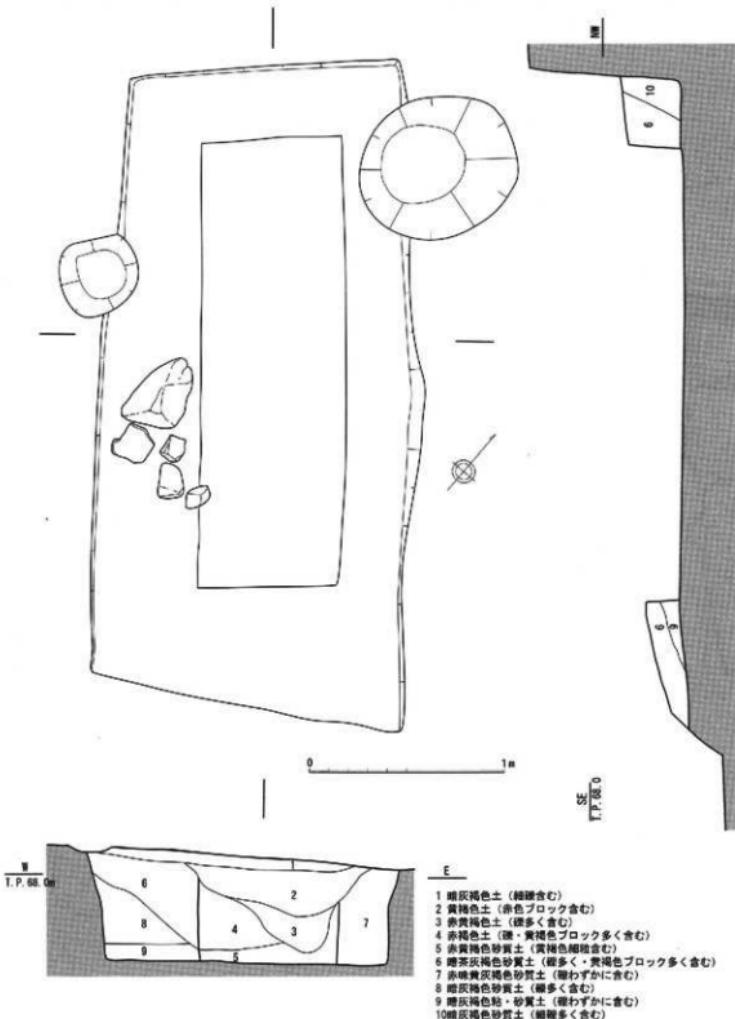


図6 地福寺遺跡 木棺墓 平面・土層断面図

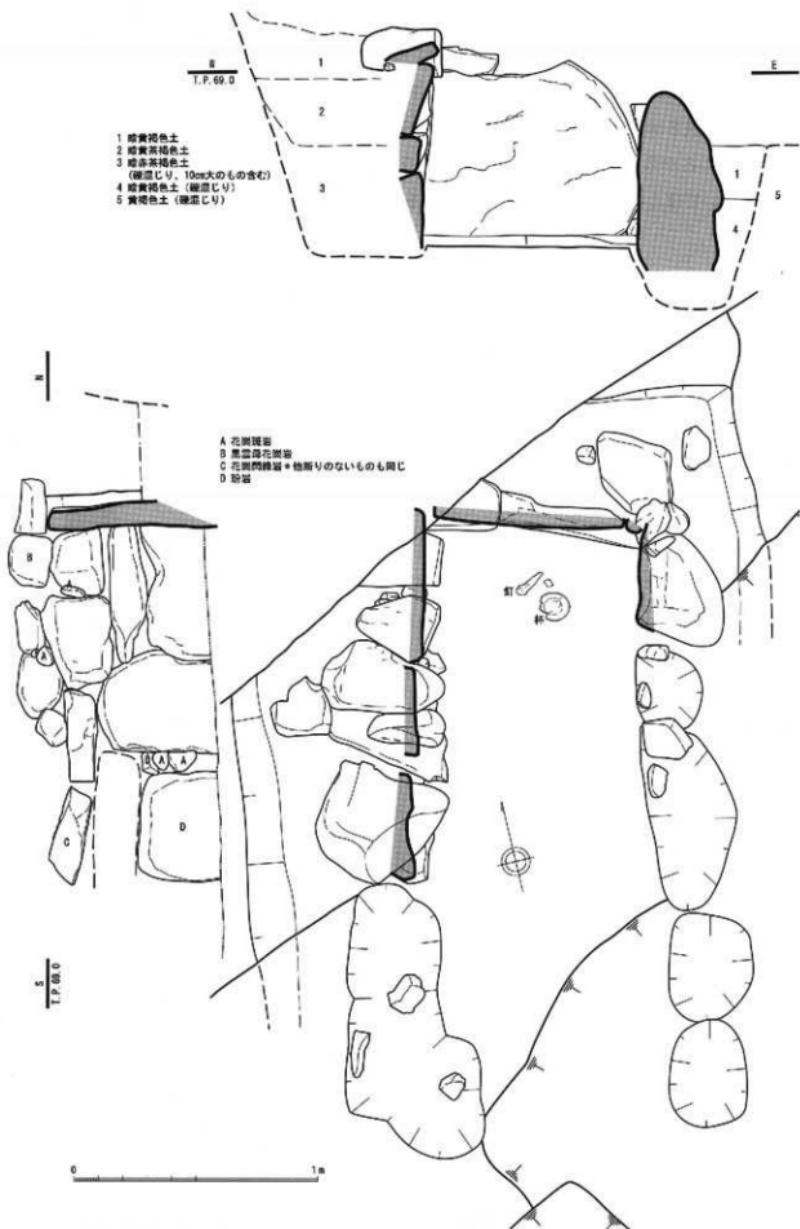


図7 地福寺遺跡 横穴式石室 平面・断面図

1.00 mの板状の石を立てて基底石に用い、上部の隙間に0.20 m程の礫を充填し、内側への倒れこみを防ぐ。その上は0.30～0.60 m程の石を横積みにする。この石室石材の上面では外周を0.20 m程広く掘った墓壙を検出し、地山土に似た小礫を含む黄褐色土を埋上としていることを確認した。すなわち、斜面を幅2.1 m程掘り込んで墓壙とし、墓壙壁との間を裏込めしつつ石室材を組みあげたものと推測される。

石室内からは、残った北半部分の床面中央より土師器碗完形品が正位で、すぐ北西側では鉄製品が出土した。出土土師器より7世紀後半の時期が考えられる。石室は新設道路肩部下に埋没保存となった。  
(富田)

## 第2節 出土遺物

### 1. 一石五輪塔・石碑について(第B・C図)

層塔付近より出土した計28体のうち、ほぼ完形のものが22体・空輪もしくは空輪+風輪のみのものが5体・石碑が1体となる。

これらの五輪塔は一石を彫りだして作られた、いわゆる一石五輪塔と呼ばれるもので、今回見つかったものはそれぞれの大きさに差がある。

各部寸法は空輪が高さ7.2～14.3・幅8.7～16.5cm、風輪が高さ3.7～10.5・幅9.0～18.7cm、火輪が高さ3.0～10.5・幅9.0～16.0cm、水輪が高さ6.0～15.5・幅11.0～16.5cm、地輪が高さ8.0～22cm・幅10.7～16.0cmである。なお、地輪と基礎部は上部の綺麗に面を仕上げている部分を地輪、その下の仕上げが粗い部分を基礎部として採寸を行った。

層塔北側のうち10・14は正面形が舟形の石塔で、その正面平坦部にそれぞれ五輪塔が彫られている。10は高さ36.0・最大幅21.5cmで、高さ23.0・幅7.0cmの一石五輪塔が22基、隣り合って彫られている。14は高さ43.5・最大幅24.0cmで、高さ22.5・幅6.0cmの一石五輪塔が1基彫られる。なお、10・14ともに五輪塔が彫られている正面平坦部を五重塔の方向へ向け、立ったままの状態で見つかった。

石碑13・29はともに花崗岩製。三角柱状で、その1面にそれぞれ銘文が刻まれる。13は総長36.0・最大幅11.0cm・「延寶戊午年七月十八」の銘。29は総長28.5・最大幅10.0cm・「南無大慈大悲口」の銘。

この2体は出土状況・材質・形・寸法より判断すると29を上とした同一個体と考えられるが、直接接合ができない。その両者をつなげる間の部分は今回の調査では見つかっておらず、全文は不明である。残っている部分の銘文を見てみると、13には「延寶戊午年」(西暦1678年)の記年銘があり、これは江戸時代前期に当たる。13・29が見つかった状況から、これらが五重塔北側の五輪塔9～12・14・15と無関係とは考えにくく、これらの五輪塔も石碑と同時期に設置されたものと考えられる。『安威川総合開発事業に伴う文化財総合調査中間報告書』によるところ、同地に13の記年銘と同じ年代の舟形板碑の三界萬靈供養塔が記載されている。また、南西

に接してある観音堂の棟札にも「延寶六戌午年」の年代が知られ、その建築時期との関連性もうかがえる。29の銘文「南無大慈大悲口」は最後の文字が判読不明であるが、本来真言宗であった当寺が天正年間(1573～1591年)の再興より浄土宗となり、その教典『法華経』の一部である『観音経』の中に「南無大慈大悲觀世音菩薩」と唱和する部分があることから、「南無大慈大悲觀世音菩薩」と続くものと思われる。

## 2. 木棺墓 SX01 出土遺物

五重塔より真下やや南よりに検出した木棺墓 SX01 からは、木棺の陥没に伴った落込みに相当するであろう上層より土師質の磚・丸瓦、下層より土師器甕が出土する。

平瓦 1 は、最大長 6.0・厚さ 2.0cm。下面に工具による沈線が 10 条程あり、また側面にも工具による沈線が 1 条施されている。丸瓦 2 は、最大長 7.25・最大高 4.4・最大厚 1.5cm。外面は調整痕がはっきりしないがナデか。小口部は布でナデ調整。内面は全体を綱目で調整後、段差部

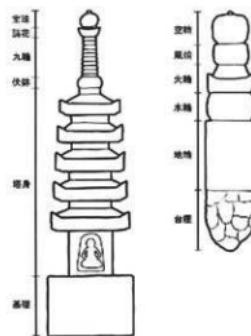


図 8 石製品模式図



図 9 地福寺遺跡 出土石碑拓本

表 1 出土石製品観察表

一石五輪塔

番号	空輪高 (幅)	風輪高 (幅)	火輪高 (幅)	水輪高 (幅)	地輪高 (幅)	台座高 (幅)	備考
1	9.5 (8.7)	9.3 (9.0)	5.0 (12.3)	8.5 (12.0)	20.7 (13.0)	11.0 (12.7)	
2	7.2 (9.5)	3.7 (10.0)	3.0 (9.0)	6.0 (11.0)	12.5 (10.7)	11.8 (10.4)	
3	12.0 (11.6)	6.5 (11.0)	—	—	8.0 (11.5)	17.5 (11.5)	
4	14.3 (14.0)	8.5 (15.5)	—	—	—	—	
5	8.0 (9.4)	4.4 (18.7)	4.7 (12.3)	—	—	—	
6	7.3 (9.5)	5.0 (10.0)	5.6 (12.5)	7.0 (16.5)	22.0 (14.5)	19.0 (16.0)	
7	8.0 (9.0)	5.0 (9.0)	7.0 (11.5)	7.0 (12.0)	7.0 (12.5)	15.0 (12.5)	
8	12.0 (12.0)	—	—	—	—	—	
9	—	—	12.5 (16.0)	8.0 (15.5)	12.5 (16.0)	7.5 (16.5)	
11	—	—	7.0 (12.0)	7.0 (12.0)	10.0 (12.0)	5.0 (12.0)	
12	—	—	10.0 (15.0)	8.5 (14.5)	11.0 (16.0)	—	高さは見える範囲
15	5.0 (10.0)	4.0 (11.0)	8.0 (13.0)	7.0 (12.5)	13.5 (14.0)	—	高さは見える範囲
16	12.0 (16.5)	10.5 (18.0)	—	—	—	—	台座地中
17	11.0 (11.5)	—	—	—	—	—	台座地中

※数値はすべて cm

石仏他

番号	総高	最大幅	備考
10	36.0	21.5	施られた五輪塔：幅 7.0、高さ 2.3×2つ 一石五輪塔：浮彫有り
13	36.0	11.0	銘文が有り、読解不明
14	43.5	24.0	施られた五輪塔：幅 6.0、高さ 22.5 一石五輪塔：浮彫有り

※数値はすべて cm

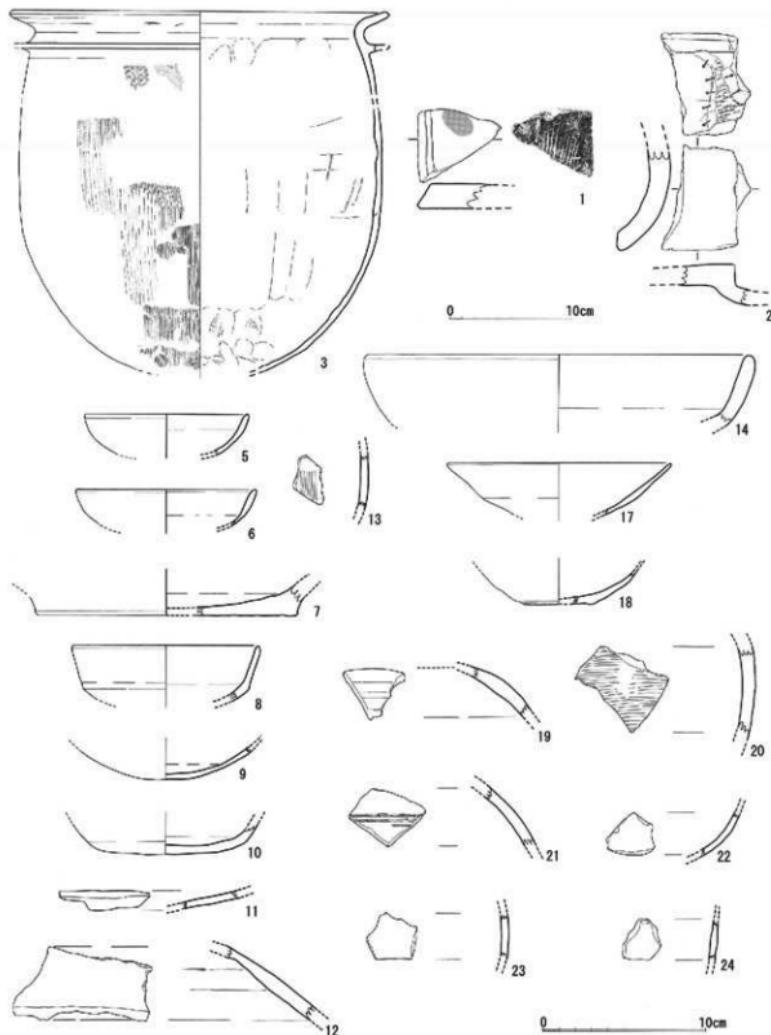


図10 地福寺遺跡 出土遺物図（1）



図 11 地福寺遺跡  
表採貨銭

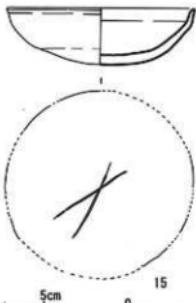


図 12 地福寺遺跡  
出土遺物図 (2)

分を中心に指ナデ。端部はヘラケズリ。内面の調整は粗雑に写る。

土師器壺 3 は、復元値で口径 31.0・体部径 29.8・器高およそ 29.5cm。外面は口縁～つば部はナデ、体～底部は全体を左上→右下方に向かってハケメ。内面は全体にナデで、頸部と底部分に指頭痕がある。また外面の体部下～底にかけてススが付着。時期は 9世紀と考えられる。

### 3. 横穴式石室出土遺物

横穴式石室からは、土師器杯と鉄製品が出土した。どちらも石室北側

表 2 地福寺遺跡 出土土器他観察表

登録番号	器種	種類	時代	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	横 窓		角 窓		鉄土	焼成	備考	
							外窓	内窓	外窓	内窓				
1 001	土師壺	一		直径 6.2	半径 2.65	—	上窓 (ナデ)	下窓 (ナデ)	外窓	内窓	やや白	やや白	下直 (直) を基本	
2 8	瓦	瓦		全長 4.4	最厚部 1.5	不明	ナデ 小口開き	ナデ 壁面に指頭痕	薄黄褐色	薄黄褐色	やや白	やや白	全体に黒斑が多い。(内面)	
3 8	更	土師器	平安 (9世紀)	(30.8)	(16.7)	不羽	口縁～底面に指頭痕	ナデ 壁面に指頭痕	理灰色	灰白色	やや白	良	反転復元、口縁～底面に黒斑有り。下部に土司有り。	
4 004	瓦	瓦	平安(9世紀)～	直径 6.2	半径 3.1	高さ 6.6	—	ナデ 口縁～底面に指頭痕	薄灰褐色	薄赤褐色	やや白	良	反転復元、口縁～底面に黒斑有り。底面に黒斑有り。	
5 005	杯	土師器	(18.9)	不羽	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	薄灰褐色	薄灰褐色	良	反転復元、口縁～底面に黒斑有り。	底面に黒斑有り。	
6 8	杯	土師器	(11.9)	不羽	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	薄灰褐色	薄灰褐色	良	反転復元、口縁～底面に黒斑有り。	底面に黒斑有り。	
7 8	不羽	陶器	(16.0)	不羽	ナデ	ナデ	ナデ 亂刷毛	ナデ	薄緑褐色 (淡)	薄緑褐色 (淡)	良	反転復元	底面	
8 8	碗	陶器	(12.4)	不羽	不羽	ナデ	ナデ 亂刷毛	ナデ 亂刷毛	薄緑褐色 (淡)	薄緑褐色 (淡)	良	反転復元	口縁～底面	
9 8	不明	明治～?	不羽	2.3	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	良	反転復元	底面	
10 8	杯	土師器	(6.5)	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	薄羽衣青色	薄羽衣青色	良	反転復元	底面	
11 8	瓶	土師器	不明	不羽	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	薄黃褐色	薄黃褐色	良	反転復元	底面	
12 8	不羽	陶器	不明	不羽	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	良	反転復元せず	底面	
13 8	不明	土師器	不明	不羽	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	黑色	薄赤褐色	やや白	反転復元せず	底面	
14 005	瓦	土師器	(23.0)	不明	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	良	反転復元	口縁～底面	
15 007	杯	土師器	昭和 (70年)	11.1	5.9	3.5	ナデ	ナデ	ナデ 底部に「X」の文様	明赤褐色	やや白	良	石室復元の七割りのところより七十	底面
16 008	鉢	陶器	全長 11.5	幅 6.8	厚 0.2	—	ナデ	ナデ	不明	薄赤褐色	良	石室復元より出土	底面	
17 009	碗?	土師器	(13.5)	不明	不羽	ナデ	ナデ	ナデ	薄黃褐色	薄黃褐色	良	反転復元	口縁～底面	
18 8	碗?	土師器	木原 (4.2)	不明	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	良	反転復元	底面	
19 8	不明	複数個	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	薄灰褐色	薄灰褐色	良	反転復元せず	底面	
20 8	不明	頭枕器	不明	不明	ナデ	タカキ	タカキ	ナデ	灰褐色	灰褐色	良	反転復元せず	底面	
21 8	不明	頭枕器	不明	不明	ナデ	タカキ	タカキ	ナデ	灰褐色	灰褐色	良	反転復元せず	底面	
22 8	碗	瓦器	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黑褐色	黑褐色	良	反転復元せず	底面	
23 8	不明	土師器	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	薄黃褐色 (乳色)	薄黃褐色 (乳色)	良	反転復元せず	底面	
24 8	不明	土師器	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	薄黃褐色 (乳色)	薄黃褐色 (乳色)	良	反転復元せず	底面	
									23と同一個体か?					

( ) 内数字は反転復元後の値

の床面ほぼ中央部分から揃った状態で出土しており、これらは被葬者の頭部付近に置かれたものと思われる。

土師器杯 15 は約 60% が残存。口径 11.4・底径 5.9・器高 3.5cm。内・外面ともにナデ調整で、外面底に工具で「×」の文様がつけられている。7世紀後半頃と思われる。

鉄製品 16 は全体的に錆が付着し本来の形は不明であるが、現状では最長部 11.8・最厚部 4.2cm である。

#### 4. その他の遺物

石塔付近上層・木棺墓・横穴式石室以外で、4 の錢貨を除いて調査区内で出土したものに土師器・須恵器・陶器があり、計 18 点を図化した。

4 は寛永通宝、直径 2.5・厚さ 0.13cm、地福寺境内より表採。

5 は土師器杯、復元口径 10.0cm、内・外面ともにナデ、口縁～体部片。6 も土師器杯、復元口径 11.0cm、内・外面ともにナデ、口縁～体部片、他に同一個体と思われる細片が 1 片あり。

7 は器種不明の陶器、復元口径 15.9cm、内・外面ともにナデだが外面は施釉されている。外面底はヘラケズリ後ナデ、底部片。8 は陶器碗。復元口径 13.4cm。内・外面ともにナデ後施釉。口縁～体部片。9 は器種・種類とともに不明、底径 2.3cm、内・外面ともにナデ、底部分は回転ヘラ切り後ナデ、体部下から底部片。10 は土師器杯、復元口径 6.5cm、内・外面ともにナデ、底部片。11 は土師器皿。内・外面ともにナデ、体部片。12 は器種不明の陶器、内・外面ともにナデ、内面に輪積み痕あり。体部片。13 は器種不明の土師器、外面はナデとハケメ、内面はナデ、外面にススが付着、体部片。14 は土師器鉢。復元口径 23.0 cm。内・外面ともにナデ。口縁～体部片。

17 は土師器杯。復元口径 13.5 cm、内・外面ともにナデ、口縁～体部片。18 は土師器椀、復元口径 4.3 cm、内・外面ともにナデ、体～底部片。19 は器種不明の須恵器、外面はヘラケズリ・ヘラケズリ後ナデ、内面はナデ、体部片。20 は器種不明の須恵器、内・外面ともにタタキ、体部片。21 は器種不明の陶器、内・外面ともにナデ後施釉、体部片。22 は瓦器椀、内・外面ともにナデ、暗文は不明、体部片。23 は器種不明の土師器、内・外面ともにナデ、体部片。24 は 23 と同一個体のものと思われる。

(富田)

(注) 調査については、藤田道子・藤井信之・當川卓見・大矢祐司・高嶋千佳・三中真希代他、諸端諸氏の協力を得た。

## 報告書抄録

ふりがな	くわのはらいせきはくつちょうさがいよう						
書名	桑原遺跡発掘調査概要						
副書名	安威川ダム建設事業に伴う桑原・地福寺遺跡の調査						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	一瀬和夫・小川裕見子・富田卓見						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351						
発行年月日	2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
桑原	いのわらし おもろまご くわん	茨木市大字桑原	135 27221	34°51'20" 135°34'02"	2004年9月21日 2005年5月20日	5180m <sup>2</sup>	ダム墳土処分地
地福寺			137	34°51'47" 135°33'49"	2004年9月21日 2005年2月4日	74m <sup>2</sup>	用地買収箇所

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桑原	集落 古墳	縄文時代 弥生時代 古墳 古代 中世	古墳：溝、落ち込み 古代：溝、ビット 中世：溝、谷、ビット	縄文時代：土器 弥生時代：土器 古墳時代：土器、灰窓器、陶器 古代：黒色土器、土師器、須恵器、 縄文 中世：土師器、瓦器、瓦、陶器等	東半部に中世に埋没した複数の谷。 古代～中世にかけて掘立柱建物、溝。
地福寺	墳墓	古墳時代 古代 近世	古墳時代：横穴式石室 古代：木棺墓 近代：石塔	古墳時代：土師器、須恵器、板瓦 古代：土師器、陶器等 近世：土師器、陶器等、瓦 ・石柱、石碑	上層でテラス造成。 平安時代の木棺墓。 7世紀後半の横穴式石室。

### 桑原遺跡発掘調査概要

安威川ダム建設事業に伴う桑原・地福寺遺跡の調査

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351

発行日 2006年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所



桑原遺跡遠景（北から）



桑原遺跡遠景（南西から）



桑原遺跡全景（垂直）



桑原遺跡全景（北東から）

上：地福寺層塔現況（南から）  
下：地福寺層塔移設・調査後  
(南から)



地福寺層塔（南東から）



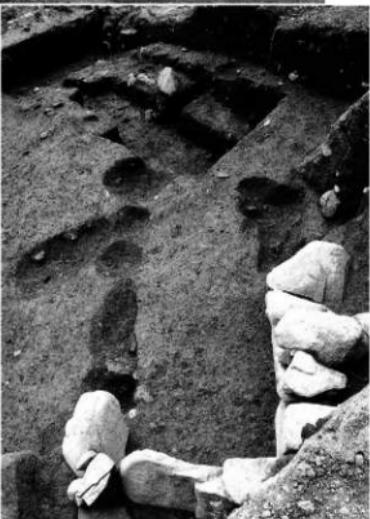
一石五輪塔・石碑（南東から）



上：地福寺遺跡 墓塚全景（東から）  
下：地福寺遺跡 墓塚全景（南東から）



地福寺遺跡 横穴式石室（南から）



地福寺遺跡 墓塚全景（北から）



地福寺遺跡 横穴式  
石室玄室内堆積土層  
(南から)



地福寺遺跡 横穴式  
石室遺物出土状況  
(西から)



地福寺遺跡 横穴式  
石室側壁 (東から)



地福寺遺跡 木棺墓（南東から）



地福寺遺跡  
木棺墓内  
土層断面  
(南東から)



15



3



16



地福寺遺跡 出土遺物



